

紹介

二期を割して居る様に説いて居るが、頁數に制限されてか一般羅馬法の發達と如何なる關係に立つたかを闡明されて居ないのは物足らなく感ぜられる。(岡島)

Alfred von Martin:

Soziologie der Renaissance

Beiträge zum griechischen und gräkoägyptischen
Eherecht der Ptolemäer- und frühen Kaiserzeit.

v. Strawos G. Huwariak (Vlg. v.

Theodor Weicher, Leipzig 1931.

Leipzig 大學、法學部の發刊に係る rechtswissenschaftliche Studien と呼ぶ叢書の第六十四冊として、表題の小冊子が出版された。本文僅かに六十頁に満たない要約的のもの、簡潔なる裡に大要を把握せるを悟らしめられる。

緒言の他、埃及に於ける希臘人の完全結婚契約及びその效力 不完全結婚契約及びその效力、帝政時代に於ける希臘埃及人の完全結婚、並びに *gamos agnathos* に就き説く、不完全結婚契約は完全結婚契約に比へて、夫は妻に對して扶養其の他の義務あるは等しきも、*Sexus* 條件のある點が異なるを明かにし、紀元前五世紀の半に行はれたクリト島の *Gortyn* 市法と對比して居る。更に *gamos agnathos* は *gamos engraphos* に對する名稱で、著者自らも疑點な幾部分存するとしながら、一面扶養の義務より、他面希臘人の不完全結婚より之を解かんとして居る尙、歴史的に Ptolemy 時代と Augustus 以降の帝政時代との

ルネサンス文化の研究に於て、ルネサンス文化とその背景をなす社會、即ち、新興 Bürgertum の社會との關係を考へんとする事はその最も重要な問題の一つであり、慎重に研究すべき性質のものである。而してこの問題については既往の研究に於てもしばしば反省されてはゐたが、この問題を取り上げて組織的な綜合をなすものなく、所々に言及するに止まり物足らぬ感があつた。かゝる折から本書は出された。Zur Hygiene und Rhythmik bürgerlicher Kultur なる副題が本題と共に先づ吾人の心をとりうる。

著者 Martin については、吾人は彼が現在ゲッチンゲン大學の社會學教授であるといふ事の他に、從來の業績によつてルネサンス殊にフアニスムに關する造詣深き事を知つてゐる。而して本書は、彼が Alfred Vierkandt の依頼により Handwörterbuch der Soziologie に執筆した Kultursoziologie der Renaissance なる項目がその辭典たる性質上多くな割愛せねばならなかつたので、それを補ひ全體的な綜合をなす意圖によつて書かれたもので、すでに發表済みの Der Humanismus als soziolo-

gisches Lähmenen, Archiv für Sozialwissenschaft und Sozial-

politik. Bd.65)なる論文の内幕の一部として收められてゐる。

Martin 博士の序文の中に出てゐる。„Die meist mehr oder weniger ‚schlingelig‘ gesehene Renaissanceepoche wird hier mit der Sonde einer grundsätzlich disillusionierenden Fragestellung angefasst: es wird die Frage gestellt nach der gesellschaftlichen Realität, die hinter jene Kultur stand, — nach der hier zum ersten Mal in der modernen Geschichte auftretenden Schritt von „Besitz und Bildung“……Die kulturelle Auswirkung dieser intermediären Position galt es zu verfolgen durch all die Wandlungen hindurch, welche diese Gesellschaft im Verlauf eines in Aufstieg und Niedergang sich vollziehenden Prozesses durchmachte……“ (S. VIII—IX) 又、即ち彼は本書に於て、一つは復興期に於ける Besitz 及 Bildung 換言すれば有産階級 (Besitzschicht) と教養階級 (Bildungsschicht) が如何なる關係にあるかを考へ、今一つはかかる問題を取扱ふに、單にある時代に於ける Bildungsinhalte を把握する事を以て満足せず、動的な立場より變遷を追究し、Aufstieg 及び Niedergang の經過を明かにせんとする。即ち、Physiognomie の他に Rhythmik を問題とする。本書のライントモチーフをなすものは、(1) の點である。而して彼は、(2) のモチーフを (1) Die Renaissance-Dynamik, 2) Die Kurve des Verlautes, 3) Die Renaissance-Gesellschaft und die Kirche の三章に分けて開展して

る。

吾人は、このに於て彼の云ふ社會學なるものが如何なるものな意味するやを考へる事が出来る。先の二つのモチーフにより、更に又冒頭に於ける Karl Mannheim 氏の Dedication を考へ合せると、彼の云ふ社會學が、フランクフルム流の知識社會學 (Wissenssoziologie) の立場よりして言はれたものであらうと考へられ。

たゞ本書に於ては綜合を主とした事より、その理論を裏付けすべき史實や引用を出来るだけ控へたため一抹の物足りなさを覺えるが、これは今後更に大なる著作に期待したい。

要するに、本書は知識社會學の立場よりルネサンス文化を説明せんとしたものであつて、暗示的な興味深き綜合をなし、引締つた行文と相俟つて、讀者をして巻を掩はしめない。讀者は本書から實を暗示を得るであらう。而してこの書を歡迎し推賞する所以がある。

(Verlag von Ferdinand Enke, Stuttgart, 1932. 147 Seiten.
R. M. 6.50.)

J. W. Thompson:

Economic and Social History of Europe
in the Later Middle Ages. (1300—1530).

アメリカに於ける歐洲中世史の研究は、Law を始め、現在に於ては Haskins, Thompson 等を中心とする活躍によつて吾人

の注意をうながしてゐる、シカゴ大學中世史教授 Thompson 博士は、數年來、Economic and Social History of the Middle Ages, Feudal Germany, The Middle Ages 等を續々公にして華々しき業績を擧げてなり、殊に、Feudal Germany はアメリカに於ける歐洲中世史文獻としては近來の出来として推賞されてゐる事は勿論、ドイツ學界に於てもその價値を認めてゐるのである。

本書は Thompson 教授の最近の著作であつて、前者 Economic and Social History of the Middle Ages の續篇であり、前者と同じく The Century Historical Series の一書として出されたのである。したがつて、その目的とする所も前者と同じであり、前者の序文中の "In substance and form the book is the product of actual classroom teaching. Indeed, much of the material here presented has been worked out with my own students in seminar. It is hoped that the knowledge and experience so gained may be of service to the other teachers than myself and to the other classroom than mine" なる言葉はそのまゝ本書にも適用される。即ち、本書はその屬する叢書の性質上からも廣く一般的の敘述をなし、教師及び學生の參考に資せんとしたものである。

内容について見るに、全卷は二十二章に分たれ、個々の章はそれ自身獨立してゐる。そして取扱ふ國々は、ドイツ、フランス、イタリヤを始め、フランドル、スペイン、及び東歐ホヘミ

ヤ、ポーランド等よりバルカン地方にまで及んでゐる。たゞ英國のみが除れてゐる事は、英國社會經濟史に關しては英語で書かれた多くの良書があり、且、紙数を制限されてゐるために割愛したのであつて、決して興味が少ないためでない事を前者に述べてゐるが、この方針を本書に於ても取つたためと思はれる。而して取扱ふ問題の範圍も中世末期社會經濟史の重要な問題は全體取上げてなり法王の財政經濟政策についても述べてゐる事は、中世社會經濟史に於ける教會の意義を重視する著者の立場より出でたもので、かゝる考へは極めて妥當であると思ふ。なほ卷末に各章の問題に對する重要文獻をのせてゐる事は本書の利用價値を高めてゐる。

要するに、本書は決して組織的なものとは言へないが、中世末期社會經濟史の諸問題へのよき手引きであり且便利な本である。吾人はすでに中世末期社會經濟史に關しては多くの良書、良き論文を持つてゐるが、一般的、入門書的なもの、出現を望んでゐたのである。それ故本書の出版はかゝる希望を充すものとして歓迎される次第である。

(The Century Company, New York, 1931. 245 pages)

〔以上、廳見〕

● 獨逸史學史

文學博士 坂口 昂著

著者は生前既に世界に於ける希臘文明の潮流・概觀世界史觀を以て我西洋史學界に獨自の歩を進め、その逝去さるゝや門下